

戦時下における山川菊栄の女性観

—『武家の女性』と『わが住む村』を中心に—

柯 著嘉

山川菊栄は、日本史上において先駆的なフェミニズム思想家・評論家・社会主義理論家として評価される。

山川菊栄に関する先行研究の多くは、彼女の理論的評論に焦点を当てており、戦前期から彼女が手掛けてきた生活的・歴史的なテキストには、十分な関心が払われてこなかった。その中でも、特に注目すべきは、1943年に保守派学者である柳田国男との協働によって刊行された二つの歴史的著作——『武家の女性』と『私の住む村』——である。これらの作品において菊栄は、細部にわたる歴史的描写を通じて、伝統社会における女性の「力」の具体的なありようを明らかにすると同時に、江戸時代以来連綿と続く女性の構造的「ジレンマ」を暗示的に指摘している。

さらに、菊栄はこの課題を時代・階層・性別を超えて、「人間」としての普遍的なものとして位置づけている。また、彼女は、幕末期の武家女性の経験を通じて、問題解決の方向性を提示した。

今日、女性をめぐる議論が活発化するなかで、菊栄が歴史叙述を通して示した女性観、また女性問題を均衡的に捉える思惟様式は、改めて検討されるべき思想的遺産であると言えよう。